

社会から排除されがちな子どもを包摂する学校の研究

原田 琢也（金城学院大学）

1 研究の目的

（１）社会から排除されがちな子どもたち

1970年代まで、日本は「一億層中流社会」と形容されたほどに、総じて言えば差異の少ない、凝集性の高い社会であった。

しかし、近年その様相は一変した。第一に、格差が拡大し、貧困が深刻さを増している。7月15日の政府が発表した「2013年国民生活基礎調査」の結果によると、17歳以下の子どもの相対的貧困率は2012年時点で16.3%となり、過去最悪を更新した。第二に、ニューカマーの子どもたちが増加している。文部科学省（以下、文科省）の資料によれば、日本語指導が必要な児童生徒数は、2012年には27,013人に及び、2003年と比較すれば1.4倍に増加している。第三に、知的障害者の数が急増している。文科省の資料によれば、2011年に特別支援学校に通う知的障害児生徒数は、111,468人であった。2001年の58,866人と比較すれば、この10年間で2倍近くに膨れあがったことになる。

それぞれは背景の異なる問題である。しかし、学校との関係を通して問題が生起し、結果的に、子どもたちが学校や社会から排除されがちとなるという点では共通している。

（２）課題が生み出されるメカニズム

教育社会学は、かねてより、学校で生起する子どもたちの課題に焦点を当て、そのメカニズムの解明に努めてきた。

たとえば高知県の漁村部落でフィールド調査を行った池田・西田は、漁業という生業と密接に結びついた生活文化と学校文化の葛藤が、教師・生徒間の相互作用を通して、若者集団に反学校文化を醸成していく様を描き出している（池田 1985, 西田 1990）。

ニューカマーのケースでは、志水・清水（2001）が、学校における教育支援が行き届く範囲が、「学校パーソナリティ」において「問題」だとみなされる部分にのみ限定され、そこに合致しない子どもたちのエスニシティは切り捨てられ、結果的に、ニューカマーの子どもたちが「見えにくい」存在となっていると指摘している。

貧困に関しては、久富善之らの研究グループ（1993）が、「よき家族」像と貧困層定型像とが表裏一体のヴェールとなって、学校と教師が生活困難層の生活の本当の姿を直視することを妨げていると指摘している。

これらの研究が明らかにしたことは、学校における子どもの課題は、個々の子どもの背景から直接生み出されているわけではなく、個々の子どもの背景から形成された特性（ハビトゥス）に対して、学校・教師が十分に適応できていないことから作り出されているということである。そう考えれば、これらの問題はすべて、個別の問題でもなければ、子ども一人一人の固有の問題でもなく、学校の在り方という普遍的な問題であると言える。

（３）日本のインクルーシブ教育システム

ところで、2012年7月、中央教育審議会は、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」をまとめ、日本がこれから共生社会の形成に向けてインクルーシブ教育システムの構築を目指すことを宣言した。

しかし、「報告」は、従来の特別支援教育を漸進的に発展させることによってインクルーシブ教育システムに到達可能であるとする。特別支援教育は、医学（個人）モデルに依拠しており、次のような問題が危惧される。①多様な子どもの課題が、一括りにされて「障害」と見なされる可能性がある。②障害児生徒が増え続け、通常学級からの分離・排除が進行する。③問題の責任は子どもの側にあるものとされ、学校の在り方は問われない。

（４）サラマンカ宣言のインクルーシブ教育

1994年のサラマンカ宣言では、インクルーシブ教育は、「万人のための教育」（education for all）と捉えられる。その特徴は、①障害のあるなしに関わらず、個々人の「特別な教育的ニーズ」に応じて、学校教育が提供されるべきこと。②それができるだけ「通常の学校」で行われるべきことである。

今、日本社会の状況を顧みたとき、求められているのは、これである。

では、どのようにすれば、それが可能となるのか。そのコンセプト、組織の在り方、指導方法などを、現場の先進的な取り組みから探り出そうとするのが、本研究の目的である。

2. 大阪市立大空小学校の実践

(1) フィールドの説明

本報告では、大阪市の住吉区にある大空小学校という公立の小学校に焦点を当てる。

大空小学校は全校生徒 230 人。特別支援学級在籍生徒が 50 人。それ以外に、何らかの課題があり、いわゆるグレーゾーンと位置づけられる子どもが 30 人。ネグレクトなど家庭の事情でケース会議に上ってくる子どもが 13 人。それらの子どもたち全員が通常学級で共に学んでいる。さらに、開校以来不登校ゼロが続いており、今年で 9 年目を迎える。これほどインクルーシブな学校は、筆者の知る限り、他に例がない。

報告者は、2014 年の 4 月から 7 月までの間に大空小を 7 回訪問し、校長の木村泰子先生にお話を伺ったり、生徒の様子を観察したりしてきた。また、関西テレビ制作のドキュメンタリー「みんなの学校」は一年間をかけて大空小学校を記録したものであり、貴重な資料となる。

(2) 大空小の学校づくりの特徴

①明確でわかりやすい学校づくりの理念

「学校の理念」は、「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」。「学校づくりの理念」は、「みんなでつくるみんなの学校」。これらの言葉が、単なるお題目としてではなく、教員・児童・保護者（サポーターと呼ばれる）の間に浸透しており、日常生活の様々な場面で繰り返し引用されている。

②分かりやすい行動指針

「自分がされていやなことは人にしない言わない」、これは「たった一つの約束」と呼ばれている。「人を大切にする力、自分の考えを持つ力、自分を表現する力、チャレンジする力」、これが「4つの力」である。これらの言葉が、あらゆる時と場で繰り返し使われ、児童も教師も、これらの言葉で、自分の言動を方向づけたり、振り返ったりしている。

③「子どものための学校」

あらゆることの基底に「学校は子どものため」という理念が息づいている。既成の学校文化は、「子どものため」と言いながら大人の都合を優先させ、子どもがそれに適応するように強制しているとされ、既成の学校文化

を変革することが目指されている。

④「パブリック」（公共性）

二つの意味がある。一つは、「どんな子どもも包摂する」という意味。子どもにどんな課題があっても決して排除することなく、学校・教師がその子どものありように柔軟に合わせていく。それは、「スーツケースではなく風呂敷で」という言葉に象徴的に表現されている。

もう一つは、「みんなでつくる学校」という発想。サポーターや地域のボランティアが多く関わり、それぞれが大空小学校と一緒につくっているというプライドを持っている。

⑤「チーム」

大空小学校では「担任」という言葉が使われず、「担当」と表現される。全ての子どもを全ての大人でみるという考え方が徹底されている。教師間で子どものことをめぐり、激しい議論が闘わされることもあるが、それもチームの糧とされる。教師を支える支援体制がしっかりしている（L 研、B 研、C 研。5 回に及ぶ新転任研修など）。教師は厳しく指導されることもあるが、決して排除されない。困ったときは必ず誰かが力を貸してくれるという同僚性・信頼関係が培われている。

⑥校長の指導力

校長自ら授業を行い、範を示している。全校道徳や大空コンサートなど全校あげての取り組みでは率先して指導にあたる。全ての子どもの状況や背景、子ども同士の関係をつかんでおり、瞬時に適切なアドバイスを行う（これは教職員集団に対しても同様）。次から次に発生する「問題」に対して、「ピンチはチャンス」と受け止めポジティブは姿勢で臨み、次々に解決していく。

(3) 結び

課題もないわけではない。校長の指導力が強いということは時としてアキレス腱ともなる。また、6 年生の算数の授業では、子どもの厳しい実態が見えてくることもある。そう考えると、中学校との接続は難しい問題であると思われる。

しかし、大空小学校の実践は、多くの人々が学校とはとかくこういうものだ、と半ばあきらめかけていた学校に対するイメージを一新し、学校に対する期待や信頼を再燃させているように感じられる。大空小学校は、今までの学校が到達し得なかった、新たな地平を切り拓きつつあることは間違いない。